

優秀賞

私と同じ「あなた」へ

名古屋大学教育学部附属高等学校 1年

鈴木 希授

私は無力だ。

ボランティアをやっているとそう感じる時がある。世界のどこかで私と変わらない大切な命がなくなろうとしている。ただただ助けたいという思いばかりが募る。行動に移したいとボランティア活動を始めた。でも私は傷ついている人の顔を一人も知らない。顔どころか名前も境遇も、もしかしたらそこで起きていることさえも、知ったつもりになっているだけかもしれない。思い続けることが支援になると人は言うけれど、

「たまたまここに生まれただけなのに、私は何不自由なく暮らしていいの？結局私は手を差し伸べるふりをしているだけの傍観者。」

そう思ってしまった時、ふとつぶやきたくなる。「私は無力だ」と。

日本で「ボランティアをしています。」と言うと人は「すごいね。」「偉いね。」と言ってくれる。でも私はそういわれている自分にまた無力さを感じるのだ。

「何がすごい？私は何もできないのに。」

こんな私だが、自分のやっていることは誰かの役に立っているのかもしれないと思ったことがある。去年の冬、台湾で地震が起こったのはまだ記憶にも新しい。百人を超える人たちが犠牲になった、なんとも痛ましい災害。そのことを聞いた時、また胸にぼっかり穴が開いたような無力感に襲われた。大切なものをいくつも亡くした人がいて、苦しんでいる人がいて。それでも私は何もできない。そんな気持ちをおさめるために、所属している団体の募金活動を行った。中学生と高校生だけの団体で、自分たちが企画して行ったこの募金は、私の考えを大きく変える事になる。

私たちが募金を呼び掛ける中、遠巻きにずっと私たちを眺めている女性がいた。

「どうされましたか？」

話しかけるとかえって来たのは片言の日本語だった。

「アリガトウ。謝謝、謝謝。」

女性は私たちの手を一人ずつ固く握ると、少しの間涙を流していた。聞くと彼女は台湾の出身で、故郷で起きた災害に心を痛めていたのだという。涙を流して喜ぶ彼女に、私は活動を続けてよかったと心の底から思うことが出来た。顔が見える形で支援ができたのはこの時が初めてだった。私にはこうしてお金を集める事しかできない。人々の心に寄り添うなんてできない。今はそれでもいいじゃないか。その時に思った。私がやることで笑顔になる人はほんの少しかもしれない。それでも今、確かに一人の人の心の支えになることができている。目の前に一つ笑顔がある。あの笑顔は私にとって数百個の笑顔と同じくらいの価値があった。

それでもこの世界で、傷ついている人がいる。誰かを傷つけている人がいる。飢えに苦しむ人がいる。災害で大切なものを亡くした人がいる。戦争に振り回されて失われる命が

ある。この現実は今も変わらない。私だけの力ではこれを変える事は出来ないだろう。だって私は微力だから。でも、無力ではない。このことを台湾の女性が教えてくれた。いつか、今までのように顔も現状も知らない「誰か」にでなく、本気で助けたいと、守りたいと思える「あなた」に支援をできたらと思う。いろんな国や人々の現状を知り、大切な「あなた」を増やす。いろんな「あなた」がいても、みんな結局は私と同じだ。同じ大切な命を持っている。今の私のような小さな力を束ね、大切なものを救える大きな力に変える。それが私の将来の目標だ。

どうかこれを読んで、「いい経験をしたね。素晴らしい。」などと言わないでほしい。ただ私は「微力な一人一人でも誰かの心を温めることができる。」このことを今、私と同じ無力感を感じているかもしれない「あなた」に、私と同じ目標を持っているかもしれない「あなた」に、知ってほしいだけなのだから。